

《回 想》

60年代、中国研究の奇禍 ——新島淳良と竹内実のこと——

(中国研究所所員) 菅沼 正久

中国研究の奇禍について

状況のなせる禍という意味に理解して、1960年代、主として文化大革命に由来して生じた出来事を、ここでは奇禍とよぶ。普通であれば問題にならなかったことが、1960年代の状況では事件となったり禍を招いたりした。1960年代の中国研究はそうした時代環境のもとにあった。

1960年代は国際共産主義運動の転換期であった。1950年代は新中国の創生期であり、そのような中国と交際するソ連にとっても新局面であった。1960年代に進行した事態は、中国では文化大革命の潮流であり、ソ連では「経済改革」の試みであって、相互に背反する傾向であった。

一つの転機が中ソ論争（1964年）であった。2000年3月に増刷（第二版）された呉冷西『十年論戦——1956～1966、中ソ関係回憶録』（中央文献出版社刊）が詳述する如くであった。頂点は1964年7月に中共中央の決定稿となった「九評——ニセ共産主義者フルシチョフとその世界史的教訓」の公開論争であった。ちなみに「九評」（第9回論文）はのちに「四人組」の1人となる康生が草稿を執筆したとされる。

1964年当時、中ソ両国はすでに対立の道を歩みはじめていた。ソ連は中国が「現代修正主義」と批判する「経済改革」に傾斜した。中国は文化大革命の序曲をなす、農村社会主義教育運動の綱領的文件、「前十条」が1963年5月に提起された。1950年代の中ソ蜜月は終わった。両党のキーパーソンは毛沢東であり、フルシチョフであり、劉少奇は「中国のフルシチョフ」として暗示された。この経緯が示すように、中国文化大革命の核心は劉少奇批判であり、ソ連批判であった。こうした

政治思想的構造のもとで、のちにのべる奇禍が生ずる。

1960年代に日本の中国研究が遭遇した奇禍の最大は、プロレタリア文化大革命研究であり、かなり高い水準の社会科学の素質の要求される課題であった。中国研究所をふくむ中国研究者にそうした準備が十分にあったということはできなかったと思う。

1960年代を通じての論題は、過渡期論（資本主義から共産主義に至る過渡期社会論）および社会主義の利潤論争が最たるものであろう。学術的には呉敬璉「社会主義社会の過渡的性質」（『経済研究』1960年第5期）とリーベルマン「計画・利潤・報償金」（『プラウダ』1962年9月9日）の発表と、わが国への紹介がきっかけとなった。

中国研究所は呉敬璉論文の紹介と論争に一定の役割を果たした。しかし、所員の山下龍三さん、福島裕さん、金丸一夫さんらが論争に積極的に参加したほかは、渦中にはあったが論争の発展に大きな役割を果たすものではなかった。利潤論争は一橋大学経済研究所岡稔さん、京都大学経済学部木原正雄さんが主導的であった。

この二つの論争は同時並行的にはじまり、進行したが、いずれも1950年代の中国研究、ソ連研究とは時期を画し、中国においては「プロレタリア文化大革命」に道を開き、ソ連においては「経済改革」に連なり、氷炭相容れない世界を形成した。

時代状況は以上の如くであるが、「中国研究の奇禍」はソ連研究と比べて尖鋭的であったと思う。新島淳良さんの『毛沢東、最高指示』の入手と翻訳、竹内実さん（武田泰淳共著の形式）の『毛沢東、その詩と人生』および『毛沢東集』の刊行はこの時期を象徴する。

「日中友好人士」新島淳良について

小島晋治さんが、『中国研究月報』2002年3月号に新島さんを「反中国分子」とみなす向きのあ

ったことに触れている。小島さんと意見交換をして、私がこの『月報』に文章を書き、「日中友好人士」新島淳良さんの若干の経緯を明らかにすることにした。私はこの際、竹内実さんのことも書いておく必要を感じた。

新島淳良『毛沢東、最高指示』（三一書房、1970年刊）。この本は新島淳良さんが中国研究者団の一員として訪中し、北京である紅衛兵司令部と接触し、原文を入手したものである。本人の話によると、文化大革命の初期に、各種の紅衛兵司令部が、それぞれに有利な毛沢東の指示、言説を集約、編さんした文件のうち、支持することのできる文集であった。入手と持ち出しにいくらかのリスクをとまうものであった。

帰国に際し、深圳境界から香港に向かうとき、検閲、没収を免れる方策として、検閲なしと予想される団長のトランクを利用した。このあたり中国側の目を掠める工夫であり、本人に「反中国」をやったという負い目の生ずる一因となったのかもしれない。

刊行に際して、相談ではないが、話しかけられ、私はやや手後れになったが、無断刊行と比べていくらかましであるから、毛沢東宛に手紙を書いたらどうかと言った。「北京市毛沢東先生」宛という方法もあるが、あるいは「台基廠中日友協気付」とか、「復興門中共中連部気付」とか、方法はあると思った。しかし新島さんはそういう考え方をしなかった。九段の中研の玄関口の下駄箱前で、40～50分程の立ち話であった。

すでに刊行されてしまい、新島さんは「反中国」をやったと内攻的に考えてしまったのか。いずれにせよ、許諾要請の手紙を出さないとしても、私は新島さんが「反中国」をやったとは考えなかった。その当時、中研の内外を問わず、新島さんを「反中国」と言った人はいなかった。あるいは本人自身が自分をそのように考えてしまったのでは

ないか。そして私たちの知らない人、知らない処で、そのような話があったのかもしれない。

中国側でも新島さんを「反中国」と言った人はいないと思う。その頃私は訪中したとき、しばしば中連部や中日友協の責任者と会う機会があったが、新島さんを知る人も少なく、あまり話題にならなかった。

国内ではどうであったのか。新島さんを「反中国分子」と言った人に会ったことがない。彼をよく知る早稲田大学の人たちと話したことがある。安藤彦太郎さんや依田憲家さんなどは、新島さんについて知見のある人たちである。当時、日中友好団体の内部は、政党事情もあって複雑であった。新島さんを友好運動のリーダーと言った人もいる。また、書斎派であって友好とか反中国とか区分けできないと言った人もいた。

竹内実さん毛沢東著作のこと

竹内実『毛沢東その詩と人生』（文芸春秋社、1966年刊）。この本の刊行当時、竹内さんはすでに中研所員を辞めていたかと思う。刊行の日付よりも2～3日前に貰い、私は「刊行の翌日、この本は文芸作品として古典の仲間に入った」と賞賛した。しかし、竹内さんは後日、武田泰淳との共著の形式をとったことは失敗であったと述懐しているが、文芸作品の範囲を出た労作という意志からのことであろうか。これは竹内実という人物と、著作『毛沢東その詩と人生』とが辿る一時期の運命と係わりがあることだと思う。

この著作の論述、あるいはその一部について、中国側から異論が提起された。私は1966年11月から12月にかけての約1カ月、文化大革命の大衆運動の高揚する中国を訪問した。中国科学院（郭沫若院長）の招きによる、日本社会科学者代表团（馬場克三団長）の一員として訪問した。北京での招待行事ののち、国内各地で展げられる紅衛兵の大交流を見聞するべく、東北、上海、江西、広

東を歴訪した。案内人は哲学社会科学部の宋守礼、姚佩君（周斌夫人）であり、旅中しきりに文化大革命論争を挑まれた。井岡山に至る途中、吉安市の招待所に宿泊した際、宋さんから竹内実と著作『毛沢東その詩と人生』についての論評が提起された。すでに1カ月近い旅行をともにしたのちであるから、当時の政治思想問題、文化大革命についての認識は、相互にある程度まで知り合っていた。

宋守礼さんの竹内実批評。『毛沢東、その詩と人生』を読んだ。力作だと思う。我々が同意できるところもあれば、同意できないところもある。その中で、廬山会議の評価、毛沢東と彭徳懷の意見書の対立は、文化大革命における大きな論点である。我々は竹内実の見解に賛成できない。毛沢東と彭徳懷の対立する見解の是非の問題は必ず歴史が解決すると思う」。

論点はこのようなものであり、話は3時間近くかかったと思う。12月の吉安の夕暮れはかなり冷えこんだ。宋守礼さんの見解の特徴は、竹内説を、少なくとも廬山会議評に関する限り、文化大革命の論調と対立するものと論じたことであり、政治論として論じたことである。「私の意見と違う」と強調した。

竹内さんは中国文学者であり、文芸評論家である。廬山会議にせよ、毛沢東の詩にせよ、文芸評論家として論じたと思う。この点に竹内さんと宋守礼さんとの対立、あるいは食い違いがあった。宋守礼さんは毛沢東を論ずるのに、文化大革命の政治論の立場に立ち、竹内さんの文芸評論を退けた。

しかし元来、この両者、両論は別のことに属する。毛沢東の詩の評論は、詩論である以上は文芸評論であり、政治論を以って評するわけにはいかない。宋守礼さんは政治論を語った。しかし、1966年という状況において、宋守礼さんは中国人として、当然の立場をとったのである。竹内さん

は執筆にあたって、時期の関係もあり、文化大革命的状况を予想せず、またその専攻の領域から出発して、相手が「毛沢東とその詩」であっても、文芸評論的であったのである。しかし、この論理は1966年の中国では受け容れられないものであった。状況判断に明敏であり、人一倍勤のすぐれた竹内さんではあったが、1966年の文化大革命を予測するわけにはいかず、当然のこととして、「毛沢東とその詩」を文芸評論の領域において論じ、政治評論の手法をとらなかった。ここに著作の状況的運命があった、当世第一級の政治指導者毛沢東の詩作の評論は難業に属し、迂闊は許されない。竹内さんと宋守礼さんの論点の食い違いは、別の状況のもとでは両論並立として済ますことができたのだろうが、1966年という状況は、双方に奇禍として作用したと思う。

文化大革命がはじまった当初、1966年から68年に至る順を回想すると、竹内さんは文化大革命を論ずるとき、賛否両論のいずれかという方法をとらなかったと思う。1966年訪中の翌年の正月、私は旅行に借用したトランクを返却するべく、洗足池のお宅を訪問したとき、そうであったと思う。間もなく菊地昌典を団長とする（と記憶する）中国研究者訪中団に招待状が届いたとき、その名簿から竹内さんの名前が落ちていたことを知った。竹内さんについては、その後、周恩来総理が言及した。周恩来自身かあるいは中国の日本関係部門の人か定かではないが、竹内さんについて関心が続いていたようである。私は1970年12月、北京でそのことを体験した。

竹内実編『毛沢東集』（北望社、1970年12月当時続刊中）。私の体験というのは、周恩来がこの文集を読み、当時は全集としては未完であったが、その内容に異論を唱えたことである。1970年秋、ある仲介を経て、周恩来からの中国訪問の招請に接した。その頃、私は農村青年との関係を深めて

いたので、11月下旬、新潟と岡山の3人の農村青年の友人と訪中することにした。香港経由で入国し、列車で広州、長沙、武漢を経て、確か3日間の日程で北京に到着した。日本を出発する直前、「三島由紀夫事件」(11月25日、自衛隊内でのクーデター煽動、割腹自殺)があった。広州に出迎えの人、北京で出迎えに集まった人、ひとしくこの事件を話題にした。日本軍国主義の台頭を憂える風潮が強かった。

北京に到着してから、10日ほど経った12月8日の午後、人民大会堂新疆庁で約7時間に及ぶ周恩来との懇談会が開かれた。午後4時から11時まで。あいだに30分の休憩を置いての長談義であった。郭沫若、紀登奎、姚文元といった顔ぶれが、懇談に列席した。周恩来が、「今日は中央の指導幹部数十人が、この懇談を聞くために集まっています」と紹介した。のちに中連部副部長の張香山さんが、「あの時、私も数十人の一人として、周総理と貴方の対談を聞きました。」と語った。

7時間の懇談は国交回復の迫る相手国日本の近況に関わるものが主題であった。そのうち今、とくに印象に残るのは、周総理が創価学会に関心をもち、話題にしたことである。周総理は「香港、台湾に学会員が増えている。この人たちの心は、北京に向いているのか、東京に向かっているのか」というぐあいには切り出した。あとで知ったのであるが、1968年9月8日の池田大作氏の国交回復提言「戦う学生部に栄冠あれ」に、周総理は強い関心を寄せた。その2年後のことであった。

このことはこの30年のあいだに、文章にする機会がなかったので、ここに記したのであるが、周総理の竹内実さんの『毛沢東集』にたいする論及は、懇談の終幕に近い10時頃であったかと思う。「菅沼先生は竹内先生とは親しい友人だと聞いています。そこで訊ねるのですが、あの文集刊行の狙いは何であったのか。まだ刊行が完成していません。12月上旬までに出版され入手した分冊を読

んで、いろいろな感想があります。例えば『毛沢東集』と題していますが、毛沢東の書いたものではない文章も収録されています。内容に不正確な点があります。」

私はこの問いに対して、正面から応えなかったと記憶する。問題は周恩来懇談会の終了後、私たちが宿舎の北京飯店に戻ったあと、夜中の12時すぎた頃であった。午後4時から始まり、11時までの約7時間は、やはりどこか緊張気味であり、遅い夕食を寛いでいたところに、珍客来訪であった。

党中連部副部長の申建さんが、外交部の王效賢さんとあと一人を伴って来訪した。主役は申建さん、王效賢さんが通訳、あとの一人がお相伴という役回りであった。申建さんが次のように切り出した。

「今晚の会見で、周総理が竹内実先生の『毛沢東集』を話題にしました。私たち中連部のものも重視し、関心を寄せています。いくつかの問題をまとめて、菅沼先生に質問します。」

その一つは『毛沢東集』刊行の意図です。なぜ日本で出版されるのに、中文の文集として刊行し、日本語に翻訳しなかったのか。

同時に、簡体字を使っていますが、この活字をどのように準備したのか。

第3、印刷刊行部数はどの位か。中文の文集が採算のとれる程に十分な需要があるとは思えないが。

第4、こういう特殊な出版を手がけた出版社はどこか。採算見込みの薄い出版に耐えられる資金力はどう解決したのか。

申建さんの質問は、だいたいこの4点にまとめることができたかと思う。これに対し、私は「帰国後、竹内実先生に訊ねて、答えられるものを答える」と返辞した。周総理会見の12月8日ののち、周総理の按配を得て各地農村を訪問する旅行に出た。河南、湖南、広東の3省を訪問し、最後に広

東省革命委員会副主任の王首道さんの主催する慰労晩餐会が開かれた。この席には周総理の指示を受けて、外交部の王曉雲さんが連絡役として出席した。翌1971年春、世界卓球選手権大会が日本で開かれ、王曉雲さんは選手団秘書長として来日した。大会の横浜会場で、予め竹内実さんに照会し、明らかになった事項を文章にまとめ、王曉雲さん到手渡し、約束を果たした。そのなかには私がはじめて知ったいくつかがあった。

文集編纂の企画と文献収集は、ジェローム・チェン（陳志讓）と竹内さんの合作であり、イギリスその他からの資料集めはジェローム・チェンに期待した。また、刊行部数は5000部で2000部を日本、3000部を日本以外で売却する。中文のまま刊行し、日本語訳はしなかったのは、海外販売と関係があった。また、海外販売の関係から、中国語の普及状況に照らして、簡体字を採用した、など。

ちなみに、『毛沢東集』の編纂刊行の事情のすべてが竹内さんに教えてもらったもので、それ以外の情報入手はなかった。

文化大革命評論の教訓

1966年代の後期は、日中関係だけでなく、国内的にも中国研究の環境は大きく変化した。中研は変化の渦中にいた。その最たるものは、文化大革命評論に関することであった。日共と中共の関係は1966年3月の宮本代表团と中共中央の対立と冷却化をきっかけにして悪くなった。1966年8月頃から、中研の我々の身辺にも波及した。たしか1967年初冬のことであったと思うが、日共から不破さんが立木洋さんを連れて中研に来た。日共と縁のある所員数人が参集を求められた。不破さんの用事は中国文化大革命に関する評論は、なるべく党の機関誌などに発表し、他の雑誌などには書かないようにと、我々に伝達することであった。不破さんたちは2時間程、中研の平野所長室にいて話をしたのち帰っていった。中研はこの頃をき

っかけにして、日共との関係が悪くなり、対立するようになった。奇禍はピークを迎えた。

経過に照らして、いくつかの感想がある。

その一つ、日共が文化大革命に反対し、中共と対立するのは、公党としての選択であった。それと併せて、「中国」と友好交流を続けるべきであった。また、中国研究者を養成すべきであった、と思う。

つぎ、ある友好団体は、文革による文化と文化人攻撃に抗議する意味で、国慶節招待には責任者を送らず、代理で済ました。苦肉の策である。

また、北京の新聞に西欧古典音楽批判の長大論文が掲載されたとき、友好団体は会員の中の古典音楽家の動揺を考慮して、記載しなかった。

故智の現代的意義。文化大革命の終えん後の政治過程、とくに今回の中共十六回大会の「政治報告」に対する異論は多い。北京の党政とは距離を置き、個人、グループの学者、芸術家との交流を重点とする。こういう選択があり得る。30年前とは違った状況であるが、文化大革命期の交流の故智に学ぶ必要を感じる。

とくに江沢民－胡錦濤政権に批判的な学者や評論者との交流に努力する試みが模索されている。困難ではあるが、必要な事業である。このことは文化大革命期の反省と直接の関係がある。